

農業技術センターニュース

目 次			
キュウリ褐斑病における薬剤耐性菌の発生実態	.. 1	ピーマン‘みおぎ’とナス‘土佐鷹’の光合成特性	.. 4
クリバネアザミウマ、モトジロアザミウマに対する有効薬剤の探索	.. 2	海外からの研修生を紹介します！	.. 5
ナバナのパーシャル大袋包装法	.. 3	高温耐性が優れ、食味の良い早期水稲有望系統「高育 76 号」の特性	.. 6

キュウリ褐斑病における薬剤耐性菌の発生実態

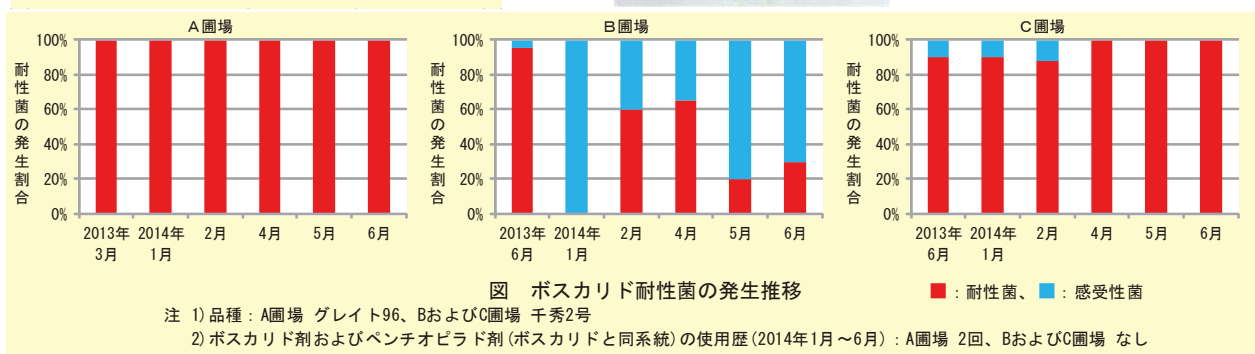
表 各薬剤に対する耐性菌の発生割合
(調査期間：2013年3月～2014年6月)

薬剤（有効成分）	調査圃場数	耐性菌率（％）
アゾキシストロビン	3	100
チオファネートメチル	3	100
ジエトフェンカルブ	3	0 ^{*)}
プロシミドン	3	0
ボスカリド	3	0～100

*) 強耐性菌の割合



写真 キュウリ褐斑病の症状



近年、高知県内の施設キュウリで褐斑病（写真）の発生が問題となっていますが、本病の防除が困難となっている原因として薬剤耐性菌の発生が疑われています。そこで、2013年3月から2014年6月にかけて、県内産地の3圃場において、5種類の薬剤に対する耐性菌の発生実態を調査しました。

その結果、アゾキシストロビンおよびチオファネートメチルに対しては、全期間を通じて全て耐性菌でした。これらの剤の実用的な効果は期待できないと考えられます。ジエトフェンカルブに対しては、いずれの圃場とも弱～中程度の耐性菌が認められましたが、実際に防除効果が低下すると思われる強耐性菌の発生は確認されませんでした。

した。プロシミドンに対しては、当該薬剤が使用された場合でも耐性菌は全く認められず、防除に有効と考えられました。一方、ボスカリドに対しては、全ての調査圃場で耐性菌が認められ、耐性菌の発生割合が変動する場合があります（表）。

また、当該薬剤を使用していない圃場でも、耐性菌の割合が高い場合が確認されました（図）。所内で行った薬剤防除試験の結果から、実用的な効果は期待できないと考えられます（データ略）。

今後は、耐性菌に対して有効な薬剤を検討するとともに、主要品種の褐斑病に対する感受性を調査する予定です。

（病理担当 山崎睦子 088-863-4915）